若越郷土研究
45の5

# 大義を世界に

## ―横井小楠の維新変革論―

三上一夫

### はじめに

日本が近代社会への転換をめざした幕末期と、いよいよ二十一世紀を迎える現代社会を比べた場合、「平成幕末」とも呼ばれるとおり、さまざまな類似点が見出される。ところで幕末期にあって、熊本藩士で福井藩の政治顧問となった横井小楠は、「世界のなかの日本」を、彼独自の儒学原理をふまえて構想し、「日本近代化」の望ましい社会変革のための類いまれな経世論策を編み出した。そこで本席では、彼の「公議論」（議会主義）と開明的な「民富論」とともに唱えた「四海同朋主義」つまり国家のレベルを越えた全世界に通じる道理・普遍的な原理を追求する「大義論」に照明をあてて、考えてみたい。

### 起伏の満ちた人生航路

小楠の論策の余りにも目立つ開明性の故に、旧来の封建秩序に固執する熊本藩主流派と対立し、中級藩士でありながら、一度も藩の役職につくことができなかった。ところが人生コースの終えんの五〇歳になってから、福井藩の政治顧問として藩政全般を主導し、さらに幕政改革にかかわり、ついで維新政権の要職に参画した。なにぶん福井藩が幕末の代表的な公武合体派雄藩として、中央政局に大きな影響力をおよぼしたのも、一重に小楠の類いまれな経世論に負うところが、きわめて大きいわけである。

彼が維新政権に参画しながら、明治二年一月五日、保守反動派のテロにより、不慮の最期を遂げたが、その後、彼の数多くの門弟（熊本・柳川・福井など）が、小楠の遺志をしっかり体して、「真の日本近代化」をめざして活躍した点に、彼の偉大な啓発力をみてとることができる。

### 見直される横井小楠像

小楠の存命中は、熊本藩ではまったくうけ入れられず、明治二年の没後も、一時期をのぞいては、熊本の地元ではうとんじられた。ところが、戦後ようやく一九七〇年代から地域の関心が強まって、彼の人物・識見が見直されて顕彰の機運がとみに高まり、一九七九年（昭五十四）には、小楠没後一一〇年祭が京都南禅寺で催された。ついで一九八二年（昭五十七）熊本市秋津町に、小楠の旧居「四時軒」が修復され、横井小楠記念館が建設された。

一九八九年（平成元）九月二十三日、熊本市制一〇〇周年記念事業と合わせて、横井小楠没後一二〇年記念シンポジウム（―小楠の思想と実践について―於熊本市民会館）が盛大に行われた。さらに一九九四年（平成六）

八月、全国レベルでの「横井小楠研究会」が発足し、第二回が福井市（於福井市立郷土歴史博物館）で実施され、以後毎年小楠ゆかりの地で行われているが、本年は七月下旬に、高崎経済大学で開催された。

一方一九九四年十一月十六日には、小楠とのかかわりから、福井・熊本両市が姉妹都市の提携を行ない、その後両市間で政治・社会経済・文化面での活発な交流のなされていることは、周知のとおりである。明年の平成十一年は、小楠没後一三〇年にあたるので、熊本市では大々的な記念事業（国際学術シンポジウム「近代東アジアにおける横井小楠」など）を目論んでおり、福井市も精いっぱい同事業に協力する手筈である。

## 日本海域の危機的情勢

小楠の経世論の全ぼうは、彼が万延元年（一八六〇）に著した『国是三論』（富国・強兵・士道）により、うかがい知ることができるが、小楠は、その「強兵論」のなかで、日本海を越えた大陸での緊迫した国際情勢につき、極東でのロシアの南下政策と、イギリスの北上政策とが、日本海で衝突する危険性をはらみ、しかも「ロシア・イギリスの二国は、必ず日本を侵そうとするから、日本の危険がもっとも甚だしい」と論じている。

果たせるかな、翌文久元年（一八六一）、ロシア艦が日本海入口を扼する対馬に来航し、不法占拠する「露艦対馬占領事件」（対馬事件）（三月四日～八月二十五日）が起きたのである。対馬藩では、早速退去を要求したが、ロシア艦長ビリレフは断固拒絶し、その後ロシア兵は、地域住民に掠奪・暴行を働き、ついには殺傷事件まで引き起こした。

そこで、対馬藩から通報をうけた幕府では、事態を重視し、早速外国奉行小栗忠順を対馬に派遣し、ロシア艦長と三度にわたり交渉したが、何ららちがあかずに、江戸に戻らざるを得なかった。こうした情報を入手したイギリス公使オールコックは、イギリスの極東政策上甚だ憂慮に堪えないとし、二隻の軍艦を派遣して、強引にロシア艦を対馬から退去させたのである。

当時小楠は、江戸霊岸島の藩邸で、松平春嶽に学問の講義をしていたが、その際対馬事件についても、収集した諸情報に基づき、種々検討したもようである。当時小楠が熊本に差し出した書翰（六月十九日付け）では、「対馬事件は、〝日本の大患〟だけではなく、〝世界の大患〟であり、いずれ露・英両国間の衝突は避けられない」との厳しい危機意識に徹したのである。

したがって、春嶽が翌文久二年の七月、幕閣の政事総裁職に就任した際に、小楠が幕政改革の基本方針として策定した「国是七条」のなかで、抜本的な海軍強化策を打ち出したのはいうまでもない。

## 李退渓儒学を基本に

実は、対馬事件を契機に、対馬の危機は日本海を内海とする日本・朝鮮はじめ東アジア全域の危機であり、東アジア連帯の防衛態勢の必要論が幕閣内でも台頭する。そして特に勝海舟が、朝鮮への訪問外交を画策することとなる。

小楠は、すでに日本海に「異国船」が出没

しはじめた嘉永二年（一八四九）の段階で、「擬二朝鮮国王一書」を記すが、そのなかで、十六世紀末の豊臣秀吉の「文禄・慶長の役」の朝鮮出兵を、無謀な侵略行為として、手厳しく批判している。

そこでわが国として、朝鮮に特使を派遣し、国書で「腹心」を打ち明け、訪問外交によって修好を結び、相互に親睦を深める、なにぶん国境を接し、民情では「一家」の家族同然で、かっての秀吉のような朝鮮出兵など、決して誰も好むはずがないと、平和友好の外交策を打ち出している。この点、偉大な先哲李退渓をはぐくんだ朝鮮への小楠のひたむきな関心によるものといえよう。

もともと小楠儒学の体系は、熊本藩儒大塚退野の学統を強くうけていた。ところが退野は、朝鮮李朝時代の代表的な儒者李退渓（一五〇一～一五七〇）の『自省録』などの著作により開眼しただけに、小楠儒学の基本が、退野を介して退渓に結びつくことになる。この点、小楠自身が、退渓を元明以降の「古今絶無の真儒」と絶賛したほどである。

退渓の学風は、内面的な心の修養を重んじ、人間性の純化をめざす「道学」とされる。「道」とは、「人倫の道」「天地の道」で、人間の本質につながる「五倫の道」に要約される。小楠も「道は天地の道也」と、李退渓の教説にしたがっている。

退渓は、近年韓国で国民的な尊崇をうけ、千ウォン紙幣には、彼の肖像と、故郷の学塾陶山書院が印刷されている。また韓国の首都ソウルの駅前から南山の北側を通り、東大門方面に向かうメイン・ストリートが、「退渓路（テゲロ）」と名づけられる。一方陶山書院も、時代の脚光を浴びている。書院には、彼の蔵書・手墨・遺品が保存され、韓国儒林のメッカの観を呈している。退渓は、久しくそこで起居して、読書・著述に励むとともに、門弟の教育にも力こぶを入れたのである。

先年ソウルの旧学友との交歓会で訪韓した際、かれらは口を揃えて、退渓の教説の基本となる「仁」の精神により、国内政治社会の平和的発展はもとより、南北朝鮮の対話路線による政治的統一への悲願を込めたものであると力説したのには、強く胸を打たれた。

ちなみに、李退渓については、近年日本・韓国・中国の思想史学者の間での共同研究熱が高まりつつある。「韓日中退渓学国際学術討論会」の名で呼ばれる学会も、その一つであるが、今後李退渓の教説に深くかかわる小楠の経世論にも、東アジア諸国から、強い関心のよせられることが期待される。

## 四海同朋主義をめざして

小楠は、『沼山対話』（元治元年（一八六四））のなかで、世界の各地で絶えず戦争の起きるのは、各国が自国中心の「割拠見」（国家エゴイズム）の域から脱却できないからで、「割拠見」から抜け切れた人は、近くはアメリカのワシントン大統領ただ一人だと主張する。

また彼は、「沼山閑話」（慶応元年）のなかで、「西洋の学」が「心徳の学」ではなく、「事業の学」であるため、かれらは絶えず戦争を引きおこさせると説いている。そして、もし西欧諸国が「心徳の学」をそなえ、「人情」を知っていれば、戦争はなくなる筋合いだと明言する。

実は、松平春嶽から小楠招へいの特命をう

けた福井藩士村田氏寿が、安政四年五月熊本に赴き、小楠に面接した際、小楠は、「爰で日本に、仁義の大道を起さにばならず、強国にならにばならぬ、強なれば必ず弱あり、此道を明にして世界の世話やきにならにばならぬ。一発に壱萬も貳萬も、戦死すると云ふ様成事は、必止めさせにばならぬ、そこで我日本は、印度になるか、世界第一等の仁義の国になるか、頓と此二筋じゃ、此外には更にない」(村田氏寿手稿『関西巡回記』)と語っている。

要は、日本が厳しい「外圧」に堂々対峙するだけの海軍強化策とともに、自ら率先して「堯舜三代の道」を歩み、「世界第一等の仁義の国」とならねばならない、そして海外の諸国間に大殺りく戦争をおこさないように、精いっぱい調停の労をとれば、西洋諸国は自ずと、わが国の「仁風」になびくことになるとの次元のきわめて高い外交構想を描き出すのである。

小楠が、慶応二年(一八六六)、甥左平太・大平の渡米に際して贈った送別の辞「堯舜孔子の道を明らかにし、西洋器械の術を尽さば、何ぞ富国に止まらん。何ぞ強兵に止まらん、大義を四海に布かんのみ」の文意は、小楠のめざす理想的な政治社会像を、はっきり表現したものといえる。

彼は、「堯舜三代の道」に根ざす「誠心」を軸に「富国強兵」の重要さを説くが、それはあくまでも手段であり、窮極の目標は、各国の偏狭なナショナリズムを超越して、「仁政」の普遍的原理＝「大義」を、国際社会に押し進める。そして各国が、「大義」にしたがい、お互いに協調して築く国際平和社会連帯の四海同朋主義の構想を説くのである。

横井小楠は、幕末の列強が相対峙する国際社会に対して、すべての国家同志の平和的共存を理想とし、日本が、真の「仁義」の体現者として、四海同朋のリーダー・シップをとる重大使命を帯びるのを、堂々提言したことは、その後一三〇余年を経た今日の日本が、国際場裡でまさにとるべき立場を的確に示唆するものといえよう。

(福井県郷土誌懇談会平成十年度総会での講演要録)